



高野山開創 1200 年～今年は何歌山が熱い～

はじめまして。和歌山県警科学捜査研究所の上田です。和歌山県工業技術センターの松本先生から引き継ぎました。松本先生とは、双方とも和歌山出身で年も同じ、お酒も嗜むということで、いろいろお世話になり、長らく親しくさせていただいております。

今年、和歌山は非常に熱いです。タイトルにも挙げておりますが、4月2日から5月21日まで高野山開創1200年記念大法会があり、7～8月には高校総体、9～10月には国体（第70回国民体育大会）、10月は引き続き紀の国わかやま大会（第15回全国障害者スポーツ大会）と続きます。大府県の方はイベントに慣れっこだと思いますが、和歌山でこれだけのイベントが続くのは大変なことなのです（もちろん警察的にも）。

今回取り上げる高野山は、和歌山県北部の奈良寄りに位置し、高野山真言宗・総本山金剛峯寺があることで有名です。開祖は言わずと知れた弘法大師・空海で、現在は、昨年から中西啓賢大僧正が第413世座主兼管長に就任されています。

高野山は、平成16年に「紀伊山地の霊場と参詣道」として紀南地方の熊野古道などとともにユネスコ世界遺産に登録され、国内だけでなく世界的に知られた観光名所となりました。そのためか、現在、高野山を訪れると、たくさんの海外からの訪問客とすれ違い、国際色の豊かさに驚かされます。高野山というと山の印象が強いですが、真言宗では「一山境内地」と称し、高野山全体を大寺に見立て、点在するお寺は小院と位置付けられているそうです。そのお寺は100寺を超え、約半数が宿坊として参詣者への宿を提供しており、宿坊では精進料理などをいただくことができます。

歴史長い高野山には貴重な建造物や文化財が多数現存しています。一般的には、檀場伽藍や奥之院などがありますが、個人的には「大門」が好きです。大門は車で上っていくと最初に目にする大きな建造物で、その存在感には何回訪れても圧倒されます。文化財等は、「高野山霊宝館」に収蔵されており、国宝21件、重要文化財143件を始めとして総数5万点以上になるそうです。また、高野山霊宝館そのものが日本現存最古の木造博物館建築で登録有形文化財になっています。

霊宝館の収蔵品は、仏画、仏像、書跡（経典等）、工芸品と多岐にわたっています。分析に携わる者としては、これまでどのような分析がされてきたか興味が湧くところです。過去には、仏像のX線透過撮影が多く行われているそうです。鎌倉時代以降の仏像では奇木造になっていることがほとんどで、内部が空洞であり、仏像や経典、結縁状などが入っている場合も少なくないとのことでした。X線透過撮影で作者が決定的になった仏像もあり、八大童子立像（国宝）では撮影で像内に月輪形の木札があることが判明し、他の運慶作の納入品と共通することから、運慶作であると認められるに至っています。

書跡では、紺紙金銀字一切経（国宝）がすごいです。



雪の中の高野山霊宝館

紺紙に金字、銀字を1行おきに交書したもので、その繊細で美しい字はつい最近のものに見紛うほどで平安時代のものとは思えません。特に銀字は、時代を経ると酸化などで枠線が残る程度になることが多いらしいですが、一切経では今なお銀色に光輝く字が多くあり不思議ですが、どのような製法だったのかは今なお謎ということです。

平清盛が奉納した両界曼荼羅図（重文）も書かずにいられません。まず4m四方程度の大きさに圧倒されるのですが、平家物語によれば胎藏界大日如來の宝冠を清盛自らの頭血を採取した絵の具で混ぜ描かせたとされており、血曼荼羅とも呼ばれています。血の存在については、過去に裏付けが試みられたこともありましたが、不明で終わったそうです。

収蔵品の分析は修理・修繕の際に行われ、分析目的はあまりないとのこと。紹介したのはほんの一例に過ぎず、まだまだ未知の領域がたくさん残っているというのが私の印象で、今後の分析次第では世紀の新発見があるかもしれません。

これら貴重な収蔵品は、各地で不定期に行われる展示会などで観ることができますが、何より高野山の雰囲気も併せて楽しんでいただきたいところです。高野山霊宝館や金剛峯寺へは、大阪難波から南海高野線とケーブルカー、バスを乗り継ぎ約2時間で訪れることができます。ぜひ、熱い和歌山の涼しい高野山にお越しくださいませ。

なお、今回、高野山真言宗・総本山金剛峯寺のHPを参照させていただいたほか、高野山霊宝館では貴重な情報を教えていただきました。紙面をお借りして感謝申し上げます。

次回は、愛知県警の奥山先生にバトンをお渡ししたいと思います。

〔和歌山県警察本部科学捜査研究所 上田啓太〕